外国人児童生徒の居場所とは何か
―あるブータン出身の高校生の場合―

宮　澤　理　恵*

What is “Ibasho (Whereabouts)” for Foreign Students?
: The Case of the High School Student from Butane

Rie MIYAZAWA

キーワード：外国人児童生徒、居場所、架け橋、マージナル、選択

はじめに

近年、日本では在留外国人が増加している。それに伴い日本の学校で馴染めず、孤立する外国人の子どもたちが問題となっている。文部科学省の「外国人児童生徒受入れの手引き」では、年々増加する外国人児童生徒の個性を幅広く認め、学級での居場所をつくることを重要としている。しかし、言葉や文化の違いが障壁になることが多く、外国人の子どもたちにとって直ちに学級がかれらの居場所になるのは難しい。

そこで、地域住民による支援活動が学校に代わる居場所として注目されている。市町村等では、学校と地域ボランティア団体が連携して、外国人児童生徒のために、放課後や夜間を利用し、日本語指導や学習支援を行っている。さらには、進路指導や就職支援にも取り組み、かれらが一刻も早く日本で安心して暮らせるよう試行錯誤を重ねている。これらは学校・学級になじめない外国人児童生徒の居場所となることが期待されているが、新たな課題も出てきている。そこには日本人の大人はいるが、子どもたちがいないことが多く、外国人児童生徒にとって同年代の友だち作りにはつながらないことが指摘されている。

かれらが日本で生活していく上で、安定した居場所が重要というが、そこで言われる居場所は、外国人児童生徒がマージナルな立場にあるということで、いずれかの集団に取り込み根付かせることを前提に議論されているように思われる。しかし、果たして外国人児童生徒にとってそれが唯一の解決方法なのだろうか。本稿では、外国人高校生の事例から、外国人児童生徒の居場所について再検討する。

*島根大学大学院人文社会科学研究科修士課程

1. 先行研究と課題

現在、日本における就学年齢（小・中学生）の外国人児童生徒は約120,000人いるといわれている。そのうち日本語指導を必要とする子どもたちは、40,485人と発表されている（文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒受入れ状況等に関する調査(平成30年度)」の結果)。各学校では国際教室を設け、「取り出し指導」[1]をする等、かれらに対して様々な対応が実施されている。

ただ、それに対する子どもたちの反応は多種多様であり、「取り出し指導」で年下の子どもと学ぶことに矜持が傷つけられる場合もあれば、通常の学級についていけず「取り出し指導」のための国際学級に居心地の良さを覚える児童生徒もいる。

宮島・加藤（2005）は、外国人児童生徒が日本人と一緒の学級で友だちができず、授業が分からなくとも、とにかくそこで過ごすことを重視する指導方法を疑問視している。なぜなら、教室中心の場で過ごすよう指導する学校側と、そこでの生活になじめず、国際学級や学校外に居心地の良さを見出す子どもたちという二者間の不一致が生じているからである。そのため、日本人の友だちを作れない子どもたちにとって学級は不安な場であり、かれらの居場所が失われかねないと指摘する。

しかし、多くの外国人児童生徒にとって学級だけが日本での居場所なのではない。1970年代後半に市民ボランティアとして始まった外国人向け日本語教室が、もう一つの居場所になりうる。矢野（2007）は、学校で友だちがいないという悩みはあるが、市民ボランティアによる日本語教室に来ると、同じような境遇の学習者に会えると楽しんで通う子どももいると述べる。

これらの研究をふまえれば、外国人生徒の居場所づくりが重要とされ、そのために仲間や友だちの存在が不可欠とされていることがわかる。そこには、仲間がいて楽しく安心した生活が送れるならば、学校であれ地域であれ、それでよいとされる傾向が見られる。

これに対して額賀（2014）は、また違った視点で議論している。額賀は、これまで一つの国に限定されていた外国人児童生徒の居場所が、実は複数箇所に存在し、ヴァーチャルな空間にまでも広がっている可能性を指摘する。国内に限定され、日本にのみ焦点が当てられてきた場をめぐる議論に、地域や国という枠を越えた広い視点が必要とされていることをこの研究は示している。

このように外国人児童生徒を取り巻く教育環境について、「居場所」という点からさまざまに議論されている。学校の中か外か，日本国内か国外かという違いはあっても、いずれも、外国人の子どもの安定した居場所の必要性を訴えている点では同じである。それらの議論では、マージナルな存在として周縁にいる外国人の子どもをいずれかの集団の中に取り込み根付かせること、つまりマージナルであることをやめることを目標にしているのである。

しかし、マージナルなままでは居場所がないとも言い切れないのではないか。本研究では、日本に移住した外国人生徒の事例から居場所を獲得していく過程を通して、こうした問いについて、改めて考えてみたい。

2. Aさんの移住ヒストリー

2.1 調査概要

ここでは、島根県隠岐郡X町[2]の県立Y

高校（以下、Y 高校）に在学している外国人生徒を対象に行ったインタビュー調査で得られた事例を取り上げる。この調査は 2019 年 8 月、ブータン出身の女性 A さん（高 2）を対象に行った。インタビューは自由面接方式で、約一時間半実施した。

多くの先行研究にみられるような親の都合によって移住してきたケースとは異なり、A さんは、自らの意志で来日を決め、母親とともに移住してきた。彼女は住所を X 町に移して Y 高校の一般入試を受験し、あえて留学生ではなく一般生徒として在学している。高校卒業後は、日本国内への大学進学を考えている。このことから、A さんは短期間の日本滞在ではなく、日本に永住する可能性がより高い移住者であり、この社会での居場所確保が重要とされる立場にいる。

2.2 対象者のプロフィール

A さんの家族構成と日本移住までの経緯を簡単にまとめておく。

彼女の父はブータン人であり、大学生の時に奨学金を得て、ドイツで勉学に励んでいた。日本人である A さんの母も、同コースに在籍しており、二人はドイツで結婚した。A さんには高校生の兄がおり、彼女も含めた家族 4 人はブータンで暮らしていた。

ブータンにいる間も、日本とのつながりはあった。彼女はパスポートを更新するため、4 ～ 5 年に一度は日本を訪れていたからだ。ただ、それだけで日本に住むことを考えたりはしなかった。きっかけは、ブータンを訪れた Y 高校の生徒やスタッフとの交流だった。親睦を深めるにつれ、彼女は「Y 高校で勉強してほしい」と声をかけられるようになった。2017 年 1 月、A さんは島根県隠岐郡 X 町の Z 中学校に、A さんの兄は Y 高校に短期滞在し、二人とも X 町の生活に好感を抱く。漠然とだが「いつか海外で勉強したい・働きたい」という夢があった彼女は、Y 高校へ進学することを決意する。父の猛反対にあったが、母や兄、高校からの協力を得ながら、辛抱強く父を説得した末、2018 年 4 月より母とともに隠岐郡に移住し、Y 高校に入学、現在に至る。

3. 日常生活と学習における問題と支援

島根県が力を入れて取り組んでいる「高校魅力化」のモデルにもなっている Y 高校は、隠岐郡の 3 町村のみならず、日本全国や海外からも生徒が集まっている。シンガポールで学びの成果を現地の大学生に向けてプレゼンテーションする海外研修の機会もある。加えて世界 8 カ国と交流を行い、グローカルに挑戦できる高校としても注目されている。このような Y 高校だが、在校生の中で海外生活を送ったことがある者たちは、現地の日本語学校に通っていたり、小・中学校時に一度は、日本の学校生活を経験したりしていることが多い。A さんはその事について、こう述べる。

「私に初めて、なんか、Y 高校でルビつけて受けるテストとかが出来たとか。初めて、そういう私だけ違う風に教えるとか。初めてらしくて。その初めてだから、私に似てる人はいないんだと思って。探したっていうか、なんか色んな人。だから、自分みたいに似てる人を探して、色んな所に出たんですけど。やっぱりみんな日本語学校通ってた子とか。（中略）そういう子とばっかりしか出会わなくて、今でも、日本人。だから、私に似てる人あんま、いないなって。」

Aさんは、学校で自分の日本語力不足を痛感した。そこで、彼女はY高校と連携している学習センターのスタッフに相談し、日本語教師をつけてもらい個人レッスンを開始する。このセンターは、「自立学習」や「グローカル人材」の育成を目指し設立された施設で、地域総がかりで生徒たちの自己実現を支援する学びの場となっている。

「日本で住むなら、こういうことから始めようっていうことから。勉強しながら、日本は楽しいところだよっていうのを学びながら学校に行ってと指導された。で、だんだん、そこから色々と変わってって。」

学習センターのスタッフは、Aさんに日本語の勉強だけでなく、まず日本での暮らし方や、暮らしていく中での面白さを教えた。次第に彼女は、日本語を学びつつ高校の授業に参加すると、学習センターで自ら学んでいることと、学校の授業が関係してくる「学びの繋がり」を実感するようになった。学校生活や授業に関して友人たちと自分を比較すると、「追いつけない」と失望するAさんも、個人的にバックアップがある学習とリンクさせることで、深い学びを獲得していく。

宮島・加藤（2005）は、高校に進学している外国人の子どもたちには、授業になかなかついていけない生徒もいることを指摘している。高校に進んでも、小・中学校であった特別支援学級はなく、授業に追いつけず、学ぶ目的がつかめず、辞めていくケースも少なくないと述べている。同じく外国にルーツを持つAさんも「授業が分からない」と感じショックを受けた。しかし、学習センターのサポートがあり、状況は好転していく。

Aさんが通う学習センターは、学校関連施設でもあり、学校との連携が非常に取りやすいことが、彼女の日本への適応を円滑に進めることにつながったと考えられる。

日本では小・中学校ともに、日本語能力が達しない生徒は、国際教室の「取り出し指導」を受けるが、Aさんの場合は高校生であるため、学校に「国際教室」は設置されていない。日本語を学ぶ場所は学外にあり、個人がプライベートな時間で、放課後や休日活動として塾や習い事に通う感覚と非常に近い。したがってそれは、学校内で日本人と外国人という分断を促す要因にならない。このようにしてAさんは、高校と学習センター双方で学ぶことで、高校生活を楽しめるようになっていく。

4. 架け橋としての自己

「いつか海外で勉強したい、働きたい」という将来の夢を抱いていたAさんだが、それはインタビュー調査中、繰り返し「架け橋」という言葉で表現された。

Aさんはブータンの中学校で、ユネスコクラブの部長として活躍した。ユニセフをはじめ、ユネスコ上部組織である国連とも関係しているこのクラブで彼女は、「人びとだけではなく、動物や環境も助け、良い世界をつくる」ことを将来の目標に掲げ、海外に目を向けた活動をしてきた。

そして、Aさんは2017年、兄とX町を訪れた際、日本人生徒にブータンの生活を紹介する経験を通じ、自らがブータンと日本の架け橋となって活躍する場をY高校に見出していく。Y高校に在籍するようになってから、この「架け橋」意識はいっそう強くなっていく。

学習センターのスタッフのアドバイスで、日本で本当にやりたいことは何かを熟考した結果、たどり着いたＡさんの答えは、「ブータンと日本をつなげたい」、「架け橋になりたい」ということであった。彼女は、父親の母国であるブータン、あるいは母親の母国である日本に自己を見出すのではなく、その二国をつなぐ関係に、つまり架け橋としての自己にアイデンティティを見出していくのである。

「架け橋」に関して、もう一つ興味深いことがある。このインタビュー調査冒頭でＡさんの本名を確認した際、彼女は本名の他に、学校で友人たちから呼ばれているニックネームを教えてくれた。ブータンでは姓名がなく、寺院から付与された名前と、どのように育ってほしいかという願いが込められた名前、これら２つ（ときには３つ）の組み合わせから成り立っている。Ａさんの姓名は、母方の日本の苗字、その後に２つのブータン名が続く。それは長く言いにくいため短くし、日本人にもなじみやすい、日本風の名前をニックネームにしている。日本にもよくある名前で呼んでもらおうとしている彼女は、そこから自分が何者かを問うているようにもみえる。彼女は、日本でブータン名ではなく、日本名に似た名乗りをすることで、自己の中でブータンと日本をつなごうとしているのではないだろうか。

彼女はブータンと日本「架け橋」としての意義について以下のように述べる。

「本当に私はブータンが好きで。本当にちっちゃい国なんですよ。本当にもう点ぐらいの国なんで。地図で見たら。その国が、もし、なくならないためには、本当に文化が大切じゃないですか。人々の気持ちと文化。その文化を大切にしないといけないから、今の若い子達の手にあるから、若い子たちが今、文化を守っておけば、将来も国はあの、そのまま国としていれるなぁって。」

やがて、Ａさんの「ブータンと日本をつなぐ」という目標は、ブータンの以前通っていた学校や兄の通っている学校と、Ｙ高校をビデオ電話で接続し、二国間の交流をスタートさせる取り組みとして実現した。その経験から彼女は、「架け橋って楽しい」と思うようになる。そして「自分がこれから何かの架け橋になれれば」と、ブータンに住んでいる時から交流のあった日本の大学のプロジェクト[(3)]で、発表の場を広げている。文化に留まらず、教育システム、国旗、ブータンがなぜ「しあわせの国」と呼ばれているかを、日本の大学生へ向けて発信するたびに、自分がいかにブータンに愛着を持っているかを改めて知るきっかけにもなっているという。

このような活動を通して、ブータンの情報を他者と共有する体験は、Ａさんに自分自身がブータンと日本をつないでいるという認識をもたらしている。彼女はインタビュー中、「発表を通じ、自分の気持ちを伝えるたびに、子どもから大人まで様々な人に声をかけてもらい、（それが新たな）架け橋になる」と述べていた。ブータンと日本の間にいるＡさんだからこそ「架け橋」としての役割を担うことができ、そこに自分の存在の意義や生きがいを感じるようになっていく。彼女の新たな居場所は、ブータンか日本のどちらかではなく、その間の「架け橋」という立場を見出すことによって獲得されているようにうかがえる。そしてこのマージナルな位置に身をおくことは、Ａさんだけの唯一無二の居場所となり、二国をつなぐ新たな可能性を創出する

ことにもつながっている。

5. 将来の選択

Y高校への進学を希望するにあたり、自分のせいで、父母が離れるのはおかしいと感じたAさんは、一人で日本へ行こうと考える。母の同意を得るものの、父からは猛反対にあう。当時の状況を、彼女は以下のように語る。

「お父さんは、私一人でも行かせたくないって。で、お母さんが一緒についていっても、離れたくないって。で、なんか、最初、すっごい反対されて。じゃあ、私ずっとブータンにいるの？とか、なんか色々あって。」

Aさんは父を説得するため、中学校を卒業するまでに成績を上げて、勉学への意欲をみせ、日本のY高校にどれほど入学したいかをアピールし続けた。それと同時に、母からのアドバイスを参考に、数年前から顔見知りとなり、連絡を取り合っていたY高校のスタッフからも父親に話をしてもらい、説得し続けた。その結果許可がおり、晴れてY高校に進学できることとなる。

現在、Aさんと母親は日本で、父親と兄はブータンでそれぞれ暮らし、生活の場が離れている。彼女の母は、Aさんが周囲の状況に適応するのに時間がかかったように、日本からブータンに引っ越して周囲の環境に順応するまでに時間がかかった。Aさんが中学生になっても母はブータンにまだ「慣れなかった」。ようやく慣れてきたと思われる頃に、Aさんの付添として日本に戻ることになった。Aさんは生まれた時から勝手が分かった場所を離れることになり、母親もまた長年かけて新しい場で快適に過ごせるよう努力したことが、移動により断絶してしまう。

Aさんを悩ませている家族の問題は、それだけに留まらない。ブータンでは18歳になると国籍を選ばなければならず、今年17歳になる彼女はこのことを常に考えていると話す。国籍決定はAさんの兄も関係し、その状況を以下のように述べる。

「国籍について詳しい、あの、なんか、法律の人のところに行ったんですけど、そういうの（一人がブータン国籍、もう一人は日本国籍を選択すること）あんまり。まあ、出来るはできるけど、そういうのあんまりよくない。家族が離れた感じになっちゃうから、選ぶなら二人とも日本か、ブータンか。そうやって選ばなければならない。っていう話になって、考えてます。」

Aさんの兄は今年18歳であり、正に今、国籍を選択しなければならない時期にある。国籍をブータンか日本かに決定する際、「親は関わらず、兄と二人で」相談し合うことになっているという。彼女の中で兄は同じ境遇の貴重なロールモデルだけではない。「もし自分がブータンで生活していたら」、どんな将来が待ち受けているのか、自分と年齢の近い兄は複眼的な視点を持つ上で、ブータンにいる時の等身大の「私」としても重要な役割を担っている。そして国籍選択は将来選択にも関わるとAさんは捉え、以下のように語る。

「いつも考えてます。国籍だけじゃなくて、これから将来どうなるかとか。そこもお兄ちゃんと、二人でどういう、二人一緒じゃないけど、お兄ちゃんどういう道もっていくか、お兄ちゃんずっとブータンにいるのか、私はどうするのか、とか考えたりしています。ハー

ドです。」

Aさんは日本国内の大学に進学を希望し、兄には彼女が進学する県にある別の大学に進学してほしいと語っていた。子どものころから同じ環境で育った兄を、これからも心の支えにしたいが、自分のやりたいことを考えると、兄は兄、自分は自分で将来を選択していかなければならないという葛藤を、「ハード」という言葉で表現した。

「ブータンと日本の架け橋」に居場所を見出したAさんだが、目前に迫る国籍選択は、彼女を再び悩みの世界へと逆戻りさせた。その上で、国籍選択と同等に重要視している将来選択について、彼女はこのように話す。

「キャビンアテンダントを10年ぐらいやってみて、コミュニケーションとかを、すごい色んなのを身につけてから、ま、国連か何か分かんないですけど、そういうボランティアとかに参加して将来コミュニケーション取りながら、架け橋になって、何か助けるっていうのをしたいなって思って。はい。今んとこ、そうやってつなげてます、自分を。」

彼女は分け隔てない人間関係や、たとえ失敗してもそれを責めず、相手を尊重しながら間違いを正す関係をキャビンアテンダントに見出し、それを「高校では見られない傾向」と指摘する。さらに、「そのようなキャビンアテンダントにおける人間関係が、色々な世界にあると良い」という。

実際、彼女は自身の高校生活において、先輩後輩をつなぐ役割を積極的に果たしている。Aさんは現在、学年の異なる生徒同士で組まれた3～4人の共同部屋で生活している。その中でコミュニケーションが取れず生活するのは困難であるため、彼女は全学年全員に声をかけるよう心がけている。くしくもAさんが高校二年生であるという、先輩と後輩の間という立場も、学年の壁がない状況下を創出しやすくしているのではないだろうか。また、彼女が理想とするキャビンアテンダントの立場、すなわち上下関係がなく、誰にでも平等に接するという立場とも似通っている。ルームメイトはAさんの将来の夢を知っており、彼女が室内でキャビンアテンダント放送のシミュレーションを始めると、快く付き合ってくれる仲間たちである。ここでもAさんは、先輩後輩の架け橋という立場に自らの居場所をみつけ、それが充実した高校生活にもつながっているようだ。

このようにAさんは「架け橋」という将来の夢を持ち、日本の隠岐という場所で奮闘し、自らの生活を切り開いている。そこで彼女は自分を理解してくれる友人たちやブータンと日本の架け橋、それぞれにAさんだけが作り出せる居場所を創出し、今では外国である日本で生きがいをもって暮らしているのである。ブータンか日本か、どちらかを選ばなければならない国籍選択は彼女にとって頭の痛い問題である。

6. 考　察

本節では、Aさんのインタビュー調査の分析結果をもとに、外国人児童生徒の居場所について考察する。

始まりこそ学校や学習センターから与えられた場から出発したAさんだったが、次第に自らをブータンと日本の架け橋として位置づけていく。自分が生まれ育ったブータンについて日本語で伝えていく活動を通して、両国をつなぐ役割に自分だけの居場所を創出し

ていく彼女の事例は興味深い。

確かに、Aさんのように自ら移住を考えて実行するケースは、経済状況や移住先の協力といった条件が揃わなければ実現は難しい。また、Aさんの通う高校はスーパーグローバルハイスクール指定校ということもあり、外国人生徒のための環境整備に力が入れられていた。そして、Aさんに日本語の個人レッスンをしている学習センターは学校関連施設であり、高校と学習センターの連携の下で彼女は支援が受けられたことも特筆すべき点である。なぜなら、日本語を学ぶ場所が、「取り出し指導」のように学校内ではなく学外にあるため、日本人と外国人という二分法による分断は起こらなかったからだ。以上のように、Aさんの事例から、外国人児童生徒に対する支援体制のあり方や教育環境の重要性を指摘することはできる。

しかし、それよりも示唆的なことはマージナルな存在には、マージナルな居場所があり得る可能性が確認できたことである。Aさんはブータンと日本をつなぐ活動に自らの意義を見出していく。インタビュー中、何度も繰り返された「架け橋」という言葉に表れているように、Aさんにとって居場所とは、学級や日本語教室といった特定の場所でなく、相部屋の人間関係からブータンと日本の架け橋までといった、つなぐ関係から生まれる場なのである。

彼女は一年後に自らの国籍を、ブータンか日本のどちらかに決定しなければならず、日々頭を悩ませている。しかし、ブータン人の父と日本人の母を持つAさんだけが活躍できる場が存在することが彼女の事例から裏付けられた。これまで、外国人児童生徒が安心できる居場所づくりとは、学校や日本語教室など、いずれかの集団に取り込み根付かせるということに焦点があてられてきた。またそれらの居場所が複数に存在してもよいことも指摘されているが、いずれにせよそれらに場を見出せないと、どこにも居場所がないという二重、三重の疎外感にもつながりかねない。このような状況は新たな心理的な葛藤を生み出したり、不安な面ばかりが強調されたりしてしまう。

そうではなく、双方の集団を架橋する存在だからこそ形づくれる場もあるのではないだろうか。そう考えると外国人児童生徒の居場所づくりは再考の余地があり、大きな課題となる。国や地域、学校内と学校外を選ぶのではなく、それらすべてに自らが存在しているからこそ創出できる居場所が存在する。ダイバーシティ化が進む現代では、外国人の子どもたちそれぞれに応じたサポートが真に求められる。

おわりに

Aさんの事例を通して、外国人児童生徒にはマージナルな居場所があり得ることを明らかにした。より多くの事例を通して、外国人児童生徒の居場所問題を、学級や日本語教室、国や地域という場所に留まらず、かれらが築き上げてきた広い関係性から考察していくことが必要である。なぜなら、外国人の子どもたちが歩んできている人生は、一人一人が違ったものであり、個々人に応じて安心できる居場所を探す支援システムこそが重要だからである。

Aさんの場合は、高校関連の学外学習センターが、外国の生徒も日本の生徒も同じ場で、それぞれが必要とする学習支援を提供していた。さらにAさんの目標である「架け橋」の活動を、積極的にバックアップする高校側

の体制も特筆すべきだろう。彼女はこのようなサポートを受け、相部屋の人間関係から、ブータンと日本という「架け橋」という立場に、居場所を創出しやすかったということも考えられる。この一事例だけでは、外国人児童生徒たちの居場所を十全に捉えたとはいえない。今後は、現在分析中の普通高校に通うブラジル出身の生徒を対象に考察を進めていきたい。

※本研究はJSPS科学研究費（19K02076）の助成を受けたものです。

注

（1）文部科学省は外国人児童生徒への指導・支援の一方法として、在籍学級以外の教室で指導を行うことを「取り出し指導」とし、教科学習のほか、日本語学習や生活面の指導・支援を、児童生徒一人一人に応じた指導計画で実施している。

（2）なお、本稿で用いる都市名、学校名を表すアルファベット、聴き取り対象者、その家族は、実名ではなく、また実際の名称のイニシャルではないことを記しておく。

（3）2017年度から始動した大学のボランティアプロジェクト。地域活性化の「挑戦事例」を多く有する島根県隠岐郡X町と、地域活性化が課題であるブータンをつなぐ団体。

参考文献

外務省，2019,「ブータン王国（Kingdom of Bhutan）基礎データ」.（2019年10月13日閲覧，https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html）

平山修一，2019,『現代ブータンを知るための60章』，明石書店.

川上郁雄, 2010,『私も「移動する子ども」だった』，くろしお出版.

宮島喬・加藤恵美，2005,「ニューカマー外国人の教育機会と高校進学：東海地方A中学校の「外国人指導」の観察にもとづいて」,『応用社会学研究』. No.47，1－12.

文部科学省，2008,「外国人児童生徒教育の充実方策について（報告）」.（2019年12月19日閲覧，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301/006.htm）

文部科学省，2019,「外国人児童生徒受入れの手引」.（2019年11月14日閲覧，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/22/1304738_001.pdf）

文部科学省，2019,「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況に関する調査(平成30年度)」の結果について」.（2019年12月4日閲覧，https://www.mext.go.jp/content/1421569_001.pdf）

額賀美紗子，2014,「越境する若者と複数の「居場所」」,『異文化教育』. 40，1－17.

佐藤郡衛，2010,『異文化間教育：文化間移動と子どもの教育』，明石書店.

島根県立隠岐島前高等学校，2019,「学校案内2019」.（2019年10月23日閲覧，http://www.dozen.ed.jp/wp/wpcontent/uploads/2019/05/e2e66e9ea01603b591d312f4c679c721.pdf）

スーパーグローバルハイスクール，2019,

「スーパーグローバルハイスクールとは」.（2019 年 12 月 21 日 閲 覧，http://www.sghc.jp/）

早稲田大学　平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC），2017,「海士ブータンプロジェクト」.（2019 年 10 月 15 日閲覧，https://www.waseda.jp/inst/wavoc/news/2017/03/27/2560/）

早稲田大学　平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC），2019,「【募集】海士ブータンプロジェクト（あまたん）　新メンバー募集」.（2019 年 10 月 15 日閲覧，https://www.waseda.jp/inst/wavoc/news/2019/04/09/4480/）

矢野泉，2006,「アジア系マイノリティの子ども・若者の居場所をめぐる考察」,『横浜国立大学教育人間科学部紀要．Ⅰ，教育科学』．8 巻，261 － 273.

矢野泉，2007,「エスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所をめぐる考察」,『横浜国立大学教育人間科学部紀要．Ⅰ，教育科学』．9 巻，169 － 177.